

【体験版】兄の処刑をネタ に脅され毎朝馬車で犯され る元王配首席

ちんこを筆代わりに「殿下の名」を書かされる

体 験 版

1

第1話

王命勅状第三項

兄の処刑日は王子の判子一つで決まる。

俺はそれを知っていた。署名する前から知っていた。署名した後も、知り続けることになる。

王宮裏門。朝霧の中、第二王子レヴィンの専用馬車が銀色に光っていた。四頭立ての装甲馬車。王家紋入り。御者室と客室は革製の完全仕切りで分離されている。中身は外から見えない。曇りガラスの窓越しに、光と影だけが漏れる仕様。

手には王命勅状。羊皮紙と王家の封蝋スティック。第三項「侍従としての全面奉仕」と書かれている。

かつての俺なら、こんな勅状に署名などしなかった。

元・王配候補首席。第二王子レヴィンの婚姻相手として、王立学院の王配選考会で首席を取った男。学院首席もレヴィンを退けて二度取った。剣術と書記術と典札礼法を修めた伯爵令息。誇りはあった。

だが今の俺は伯爵令息のなれの果てだ。

兄アスランが反逆罪嫌疑で投獄されてから、何もかも崩れた。爵位停止申請が第二王子の決裁待ち。兄の処刑日は内務省管掌代行のレヴィンの判子で決まる。

王命勅状の特例条項。王族司法権で、反逆罪
嫌疑段階での即決処刑が可能。法律はそうなっ
ていた。例外規定。王族にだけ与えられた特権。
父も母も既に他界した伯爵家には頼れる権力者
はいない。

時計塔の鐘が鳴る。朝の七時。

あと47分で馬車が出る。

馬車が出れば、王命勅状第三項は発効する。

俺は侍従書記官になる。兄の処刑は無期延期さ
れる。判子は押されない。少なくとも今日は押
されない。明日も、同じ条件で、押されない。
明後日も。俺が奉仕を続ける限り、判子は留ま

る。

俺は封蝋スティックを手にとった。封蝋を羊皮紙に押し当てる。王家紋が刻印される。

署名は終わった。

学院時代のレヴィンの目を思い出した。王配選考会の発表の日、首席に選ばれた俺を見つめていた目。あの目は敗者の目ではなかった。何かを待っている目だった。今、思えば、あれは「いずれ手に入れる」と決めていた目だった。

兄アスランの記憶。兄は俺より六歳上で、伯爵家を継いだ。父が早世したからだ。兄は俺に剣術を教えた。書記術も教えた。兄が好きだっ

たのは硬い黒パン。朝食に必ず食べた。釈放されれば、また兄と一緒に食べられる。兄は釈放後の朝食を待っているはずだ。地下牢で待っている。それだけが今の俺の種火だった。

「シ ril 様、馬車にお乗りください」

御者ではなかった。レヴィンの侍従頭だった。年配の男だった。表情は読めない。職務に忠実な男の顔だ。

俺は王宮裏門の階段を下りる。石段の冷たさが革靴越しに伝わる。装甲馬車の扉が開いた。

中は思っていたより広い。六畳ほどの客室。革張りのシート。中央に書記用の小机。机の中

中央に穴が開いていた。意味は察した。書記用の机に書記とは無関係の穴。何のための穴か、説明されなくても分かった。

馬車の前部、御者室との境には革製の仕切り。完全に視界を遮る厚さの革。声も漏れにくい構造のはずだ。

俺は座った。扉が閉まる。

レヴィンは奥のシートに座っていた。黒髪、深い緑の瞳。学院時代と同じ目で俺を見ていた。第二王子の正装。胸元に王家紋。腰に儀礼剣。

「乗ったな」

「乗りました、殿下」

俺は事務応戦の口調を選んだ。誇りはまだあった。「殿下」と呼ぶ以外は譲らない。学院時代は呼び捨てだった。今は「殿下」だ。それが、降格の証だった。

馬車が動き出した。

王宮裏門を出て、王都の街道へ。蹄の音と車輪の振動。装甲馬車は重い。揺れは少ないが、音は重い。

「服を脱げ」

レヴィンの勅命だった。命令形。学院時代と同じ短さだった。学院時代は「答えろ」「書け」だった。今は「脱げ」だ。同じ命令形。

「……承りました」

俺は服を脱いだ。誇りは「奉仕遂行」として処理する。「殿下の勅命だ。奉仕だ」と内心で典礼語に変換した。外套を脱ぎ、ボタンを一つずつ外し、上衣を脱ぎ、帯を解き、下衣を脱いだ。最後に下着も脱いだ。

革張りシートの冷たさが、太ももの裏から伝わってきた。冷えた革。動物の皮。質の良い、磨き込まれた革だった。革の匂いが客室にこもっていた。新しい革ではない。長年使われた、馴染んだ革の匂い。

レヴィンは羽根筆筒を取り出した。

王家紋入りの象牙色の筒。長さは俺の手の平よりやや長い。中央に縦に穴が開いている。穴の周囲には金線細工。職人の手の入った造作だった。普通の羽根筆筒ではない。この日のために誂えられたものだった。

「これを使う。聞け」

「承ります」

「これにちんぽを差し込む。奉仕中、抜くな。馬車が止まるまでだ」

「……承りました」

俺は羽根筆筒を受け取った。手の中で重みを確かめる。象牙は冷たかった。穴の直径は俺の

ペニスを受け入れる寸法だった。意図的な設計。学院時代から、レヴィンは俺の身体を観察していたのかもしれない。寸法を測って職人に発注してこの日のために用意した。

俺は自分の陰茎に手を添えた。半勃ちにする必要があった。元・王配候補首席として、感情の制御は学院で習った。半勃ち程度なら、自分で作れる。記憶の片隅にある、見たことのない女の絵姿を呼び出す。学院の図書館で見た古い宮廷画。そんな程度の刺激で十分だった。

俺のペニスが半勃ちになった。筒の穴に押し当てる。少し抵抗がある。だが、入る寸法だ。

筒の内側に陰茎を差し込んだ。

筒の内側は温かった。革張りの内装。柔らかい、毛皮のような感触。ペニス全体が、それに包まれた。亀頭の先端が筒の先端まで届いた。筒の中で陰茎が毛皮に押し付けられて軽く圧迫された。包まれる感覚。学院の制服を初めて着た時のような、新しい衣服に身体が馴染んでいく過程に近かった。

「達成しろ」

レヴィンが言った。

達成、とは奉達のことだ。射精して、量を典
礼簿に記す。それが今の奉仕だった。

レヴィンが羽根を一本取り出した。長い、白い、王家鳥の羽根。先端は柔らかく、軸は固い。鳥の名前は知らない。王家が飼育する希少種。学院では教えなかった鳥。

俺の乳首に羽根の先が当たった。

くすぐったかった。

羽根の先でゆっくり円を描く。乳首の周囲をゆっくり何度も。時計回りに三周、反時計回りに三周。乳首の周囲の肌が羽根の先の連続した接触で、少しずつ熱を持ち始めた。

乳首が立った。固くなって敏感になって、羽根の先が当たるだけで肌が反応した。乳首の先

端の小さな突起が布で擦られた時とは別の感覚で熱を放っていた。

レヴィンは無言だった。手だけが動いた。

羽根が左の乳首から、右の乳首に移った。同じ動作。三周三周。右の乳首も立った。左右の乳首が対称の熱を持った。

俺の呼吸はまだ整っていた。元・王配候補首席の制御だ。乳首程度では、声は出ない。

だが、次に羽根の先が筒から突き出している亀頭に当たった。

亀頭の縁。先端の小さな穴の周辺。羽根の先で亀頭の縁を撫でる。撫でる。撫で続ける。

「……っ」

声が出そうになった。俺は喉を絞めた。

御者室との革仕切りは厚い。だが、王命勅状
第三項発効中、声を漏らす権利は俺にない。

羽根の先が亀頭の縁を撫で続けた。射精管の
入口、亀頭の裏側、亀頭の溝。一周、二周三周。
羽根の毛先が神経の集まる場所に繊細に当たる。
圧は弱い。だが、頻度は高い。羽根の毛先が乱
れて皮膚に当たる角度が一周ごとに違う。同じ
刺激の繰り返しではない。微妙に違う角度の刺
激の連続。

亀頭の先端の小さな穴から、透明な液がにじ

んだ。先走り。羽根の毛先がそれを拾って亀頭の溝に塗り広げた。塗り広げられた液が、羽根の触感を変えた。乾いた毛先が、濡れた毛先になる。亀頭への接触感が変わる。

馬車の振動が始まった。

王都郊外の街道。石畳ではなく、土の道。馬車が揺れる。装甲馬車は重い、土の轍に取られると、揺れは生まれる。ペニスが筒の中で揺れる。羽根筆筒の穴の内側、革張りの内装に陰茎が当たる。亀頭が筒の縁に擦れる。

勃起していた。完全に。半勃ちから完全勃起まで、五分もかからなかった。ペニスの血管が

浮いて、筒の穴を押し広げる感覚。

羽根筆筒の中、革張りの内装に擦れる感覚。

亀頭の裏側、敏感な部分が、革に密着していた。

馬車の振動が陰茎を内装に押し付ける。一周ごとに、亀頭の裏側が毛皮に擦られる。

レヴィンが羽根を置いた。

代わりに、レヴィンの指が俺の耳の後ろに伸びた。

耳の後ろの薄い肌。

俺はそこが弱いことを自覚していなかった。
だが、レヴィンの指が触れた瞬間、下半身が解けた。

ひざの力が抜けた。シートに沈み込んだ。ペニス
は筒に差し込まれたまま。筒の中、革張りの内装が温かい。

俺の口から、初めて声が出た。

「あ……」

レヴィンの指は耳の後ろを軽く繰り返し、撫でていた。指先の温度。学院時代から、知っていたのか。俺の弱点を。観察していたのか。机を並べた七年間。あの目はずっと、俺の耳の後ろを見ていたのか。

「達成」

レヴィンが言った。

俺は奉達した。

羽根筆筒の中に。筒の内側、革張りの内装に白濁が放たれた。陰茎が三回脈打った。三度の収縮で最初の奉達は終わった。

筒の中の革張りが放った白濁で濡れた。ペニスを包む革の感触が滑りやすくなった。革の毛皮に白濁が染み込む。匂いが筒の中に閉じ込められる。革の匂いと、放った白濁の匂いが混ざる。

馬車はまだ走っていた。土の街道、振動が続いていた。

俺の陰茎は奉達後も筒に差し込まれたまま。

「抜くな。馬車が止まるまでだ」

「……承りました」

奉達後のペニスは敏感だった。亀頭が筒の縁に触れているだけで、痛みに近い感覚。白濁で濡れた革張りに包まれて、亀頭が動くたびに、ピリッとした感覚が走った。

だが、抜けない。勅命だった。

馬車は続けて街道を走った。土の道、振動。馬車の車輪が土の凸凹を拾うたびに、客室全体が小さく揺れる。揺れの周期は不規則だった。馬車道の状態次第。

俺は息を整えようとした。整えられなかった。

耳の後ろのレヴィンの指がまだ動いていた。

ゆっくり繰り返し耳の後ろの薄い肌を撫でていた。

俺の陰茎は奉達後すぐに、半勃ちのまま留まっていた。完全に萎えない。耳の後ろの刺激がペニスに直結していた。神経の経路が別の場所で繋がっていた。俺自身も知らなかった、身体の地図。レヴィンは知っていた。

二度目の振動の波が来た。馬車の車輪が深い轍に入った。馬車全体が大きく揺れた。陰茎が筒の中で擦れた。

亀頭の縁が筒の内側の革に擦れた。白濁で濡

れた革に。

敏感な亀頭が濡れた革に擦られた。一度。二度。何度も。馬車の振動の周期に合わせて。

俺は奥歯を噛んだ。声を出さないために。だが、息は乱れた。鼻から漏れる息の音が馬車の振動音に紛れた。

二度目の奉達はやかった。

最初の奉達から、十分も経っていなかった。

俺は再び筒の中に放った。一度目より量は少ない。だが、二度目だった。ペニスが二回脈打った。二度の収縮で二度目の奉達は終わった。

筒の中、革張りに白濁が重なった。最初の白

濁の上に二度目の白濁。匂いが濃くなった。客室の中、革と白濁の匂いが馬車の閉じた空間に充満した。

典礼簿には二度の奉達量が記される。それが、奉仕だった。

レヴィンの指はまだ耳の後ろにあった。

三度目を待っていた。

俺は息を整える隙間もなかった。馬車の振動が続く。陰茎が筒の中で擦れ続ける。耳の後ろの指が撫で続ける。

奉達直後のペニスは痛みに近い快感を引きずる。一度目より、二度目より、三度目のほうが

感覚が鋭くなる。亀頭が白濁で滑る革に擦られるたびに、ピリッ、ピリッ、と感覚が走った。電流のような感覚だった。

俺はレヴィンを見た。

レヴィンも俺を見ていた。指は耳の後ろにある。視線は俺の目に。学院時代と同じ視線。観察の視線。俺が次にどう反応するか、典礼簿に記すための視線。

俺は目を逸らさなかった。誇りはまだあった。事務応戦は続けなければならない。

三度目の振動の波。

馬車が街道の傾斜を下りた。下りの揺れ。陰

茎が筒に擦れる頻度が増えた。下り坂の振動は上りや平地と違う。連続して、小刻みに揺れる。

亀頭の裏側が白濁の溜まった革に密着している。下り坂の連続振動が亀頭を革に擦り続ける。ペニスの根元から、新たな射精の予兆が上ってきた。

三度目の奉達。

俺は声を出さなかった。

声を出す権利は、俺にはない。だが、息は乱れていた。喉の奥で声にならない音が、震えていた。陰茎が一回脈打った。三度目の量は二度目よりも少ない。だが、確かに放った。

筒の中、革張りに、三度分の白濁が溜まった。

馬車が止まったのは、王都郊外の中継地点だった。

御者室で蹄が止まった。車輪が止まった。客室は静かになった。馬車の振動が止まると、客室の中の匂いがより濃く感じられた。革と白濁。それと、レヴィンの体温の匂い。

レヴィンは典礼簿を取り出した。検分印を準備した。象牙の柄の印。王家紋。

「奉達量、典礼簿に記す」

レヴィンの決め台詞だった。

俺は筒を抜いた。ペニスは赤かった。亀頭の

縁が擦れすぎて淡く充血していた。筒の中、革張りの内装に三度分の白濁が溜まっていた。匂いが客室に広がる。

レヴィンは筒を受け取った。中身を確認した。象牙の柄の検分印を典礼簿に押した。

数字が記入された。三度分。初回基準値を上回る。学院時代の俺なら、こんな数字を予想しなかっただろう。

俺は服を着た。下着を着け、下衣を穿き、上衣を着け、外套を羽織った。誇りは事務応戦で保つ。「侍従任務報告、規定奉達量達成」と内心で唱えた。声には出さない。レヴィンの前で

は敗北の言葉は出さない。

馬車が王宮に向けて引き返した。

帰路の道は行きと同じ街道。土の振動。だがもう奉仕はなかった。レヴィンは典礼簿を閉じて、シートに座っていた。客室の中、白濁の匂いがまだ残っていた。窓は開けられない。装甲馬車の窓は曇りガラスで、開閉式ではない。匂いは王宮裏門まで一緒に運ばれる。

俺は革張りシートに座って目を閉じた。学院時代の図書館の匂いを思い出そうとした。古い羊皮紙の匂い。書架の木の匂い。だが、思い出せなかった。

馬車の振動が再開した。蹄の音、車輪の音。
装甲の軋み。同じ街道を同じ振動で戻る。

レヴィンは何も言わなかった。俺も何も言わなかった。客室の中、二人の呼吸の音だけが馬車の音に紛れていた。

王宮裏門に着いた。扉が開く。俺は降りた。

「明日も同じ時刻」

レヴィンの声だった。

俺は振り返らなかった。

ただ、署名した羊皮紙のことを思い出した。
あれが俺の選択だった。

兄の処刑日は王子の判子一つで決まる。

俺はそれを止めた。今日一日分。

明日も、同じ時刻に、止めなければならない。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

【体験版】兄の処刑をネタに脅され毎朝馬車で犯される元王
配首席